

たじみん昼話 33

多治見高校の無形資産

経済活動を成立させているのは、現物の商品（鯉節、車、洋服）の売買だけではない。会社のノウハウ、アイデアや社会関係、スマホのアプリなどのソフトウェアといった、見たり触ったりしづらいものも対象だ。経済学用語では、これらを無形資産という。スマホやPCを活用して、それらのお世話になっている世代の人達は、特にその価値が実感できるだろう。

この無形資産は、我々の想像をはるかに超える価値がある。例えば2006年の資料によると、マイクロソフト社の市場価値は2500億ドルだが、このうち工場や設備という物理的資産は30億ドルと記されている。これは、マイクロソフト社が時価総額1%の物理資産で、99%の研究開発や製品デザインという無形資産を創出していることを意味する。即ち、過去の経済活動の指標であった生産物作りではなく、アイデア、ブランド価値、サプライチェーンや社内構造だけで、巨大な会社の経営をほぼ成立させているということだ。

少し前の時代では、この無形資産に対する経済学の価値観は違った。

例えば、1960年から1970年代に、この無形資産の価値に言及していたのは、「経済はやがて非物質的なものに依存するだろう」と主張したアルヴィン・トフラーや、「人々は虚空でもまもなく生きるだろう」と無形資産の有効性を示唆したチャールズ・レッドビーター、そしてダニエル・ベル（ポスト工業化）やダイアン・コイル（脱物質化社会）ぐらいで、大半の学者はその概念すら無視する状態だったからだ。

タイムマシンができるなら、それを使用して当時の学者に直接会って質問したい。無形資産で勝負するグーグル、アップル、アマゾンの発展を想像できましたか、と。

多治見高校は図書館も充実しており実験道具も完備するなど施設は十分だ。町の中心部に位置しており立地条件も良い。その点で有形資産は良好だ。しかし本当の強みや価値は、教師生徒間や生徒相互間の信頼関係、各種行事への取り組みノウハウ、地域活動への心配り等といった無形資産があることだ。その時代の生徒や先生方、そして地域の人達が改良を続けて作り上げてきた、伝統と軽く片付けられない約100年の巨大な無形資産だ。多治見高校職員一同は、この無形資産に新たなこの時代の知見を加えることで、新しい無形資産を作りたいと考えている。創造目標は、Microsoft社を超える凄い価値のある多治見高校の創出だ。ききょうは本気でそう思っている。